何者かの転移魔法により
ジャッカルシーフの根城へと飛ばされたキョウカ
繁殖期を迎えた猛獣の眼光は鋭さを増し、
小さな来訪者を睨みつける
突然の出来事に狼狽するキョウカへと、
わずかな逡巡も見せず走り寄る猛獣
次の瞬間、幼い身体は後ずさることもかなわず、
猛る獣の腕の中でその柔肌を露わにしていた

へ、へんたい！
防犯魔石を鳴らしますよ！
や…　いや！
やだあ！
痛っ！
引っ張らないで…
ごめんなさい！
ごめんなさい！

ズズ
い…きっ…
ひぎい…う…!!
ズチュ
ズブ
ズブ
ズブ

少女の太腿と見紛うまでに肥大した
長大な交接器が、
柔肉を割り、臓腑を押しわけ、
力任せにねじ込まれる
ぶつり、ぶつりと門が破られていくたび、
キョウカは何度も意識を失いかけた
しかしエルフの生命力が、
その安息をことごとく少女から
奪い去るのだった

やぁぁぁ！
あっ
あっ
やだぁ！
あぅ…
ぎっ
いい…！
いだいよぉ…！
ズブッ
ズブッ
ズブッ

挿入されたペニスの先端から
絶えず溢れ出る多量の粘液が、
巨獣と少女の歪な結合を
かろうじて可能たらしめていた
幼い身体に剛猛な肉樹を
無理矢理収める蛮行は、皮肉にも、
その肢体の「未成熟ゆえの柔軟さ」が
あればこそのものでもあった

う…　ぎっ…！
ひぐ…
ハッ
ハッ
ズ
ズ

?
!?
?
ドプッ
ドプッ

痛々しく膨れ上がった自らの腹部越しに、
ボタボタと音を立ててこぼれ落ちる
白濁を目にしたキョウカはひどく混乱した
「それ」が何なのか
少女の知識では解する事ができなかったのだ
体内を焼き付けるかのような熱と共に、
まるで傷つけられた自分の身体から
剥がれ落ちていくかのように見えたそれを、
痛みを超える恐怖と絶望の中で眺めていた

数度の射精を経て、なおも魔獣は
果てぬ情欲に突き動かされるまま
幼い身体を弄んだ
終わりの無い責苦に感覚を失った身体は
もはやキョウカの意思を受け付けず、
少女はただ我が身の惨状から
目をそらす様に沈む夕日を見つめていた

う…

あっ

ふぁ…

ぐちゅ

ドロ…

じゅっ

ズ
ル♡
…

おぼろげな意識の中、
目の前に迫る二本の触手に気付いた
キョウカは反射的に表情をこわばらせた
数時間にわたる熾烈な凌辱は
彼女の脳裏にある「危険な質感」を
すりこませるのに十分だった

うぶ……！
んむっ
もが…
ぐぐ…
くちゅ
くちゅ

「しなやかで硬く、脈動する肉竿
鼻をつく独特な臭気とヌラヌラと光る表皮」
少女は「それ」が持つ危険性を瞬時に察知した
しかし感覚を失い、疲弊した身体は
迫る危機を受け入れるほかなかった
夜行性の魔法植物のものであろう触手は、
消耗した少女の魔力を搾り取ろうと
キョウカの口腔、舌、食道を執拗にまさぐった

うぶ！
ふ
ふ
んぐっ
おご…

んむ!?
んん…ん…
んぶっ!
ぶしゅ
ぶるるる
ずぷゅ

けほっ！
けほっ！
うえ…
かはっ！

無限にも感じられる蹂躙のさなか、
キョウカは虚ろな意識で
「あの人」との思い出を反芻していた

逆上がりの練習をしたこと
伝説のピーマンを食べたこと
ピクニックに出かけたこと
はじめて男の人と手をつないだこと

楽しいことを考えていれば、
きっと「あの人」が助けに現れるに違いない

あたりはすっかり闇に閉ざされ、
淫靡な匂いに誘い出された魔物達の
ギラギラと輝く瞳だけが
キョウカの肢体を照らしていた

夜はまだ始まったばかりだった…

ぴゅ―…
ぴゅ―…
ズチャ…
グチュ…